HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	3. 文法とやりとりを結びつける授業の試み
Author(s)	今泉, 智子
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 20, 28-38
Issue Date	2016-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65691
Type	departmental bulletin paper
File Information	toku _JISCHU20_3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

3．文法とやりとりを結びつける授業の試み

今　泉　智　子

1．授業の目的

本稿では「やりとり」モードの中の、中級前期レベルに当たる「中級やりとり（基礎）1」の授業実践を報告する。「北海道大学日本語スタンダーズ2016年度版」に記載されているやりとりモードの中級１レベルの言語行動目標、スキル、アウトカムは以下の通りである。

【言語行動目標】

日常的な話題だけではなく、非日常的で抽象的な話題についても、自分の意見を表明したり、情報を交換したり、話し合いをすることができる。

【スキル】

⑴　身近な話題について､知っていることや自分の考えを簡単に述べたり、相手に発言を求めたりすることができる。
⑵　相手に自分の意図を正確に伝えることができる。
⑶　相手の話に正しく反応することができる。

【アウトカム】

⑴　自分の専攻、母国の文化・社会について短く説明したり、相手にも同じようなことを質問したりすることができる。
⑵　話の目的と背景（事実関係）が正しく伝わるように、正確な接続詞と表現を使って述べることができ、相手に正しく理解されなかったときは、話の内容を修正することができる。
⑶　相手にわかりやすく、適切な形で聞き返したり同調したりすることができる。

やりとりモードのスキル及びアウトカムは、双方向的コミュニケーションにおける「働きかけ」と「反応」に基づいて記載されており、中級１レベルでは特に表現の「正確さ」が重視されている。本稿ではこれらのアウトカムを達成するために、主に初級文法とやりとりのストラテジーを結びつけることを中心に据えた授業のシラバス設計と教室活動の試みを報告する。以下ではまず､「働きかけ」と「反応」及び「正確さ」というキーワードに基づいて、授業設計の背景を述べる。

1.1 「働きかけ」と「反応」

「やりとり」には、「交流型やりとり」と「交渉型やりとり」の二つのタイプがある（今泉2016）。前者はいわゆる雑談のように、情報交換・相互理解を目的とするもので、会話をスムーズに展開させるために、相手の意図を推測して適切な「反応」を返すことが必要になる。後者は「依頼」や「誘い」など、何らかの課題解決を目的としたもので、相手にどう解釈されるかを考慮してその場に相応しい効果的な「働きかけ」を行うことが必要になる。そこでコースを前半と後半に分け、前半では交流型やりとり、後半では交渉型やりとりを円滑に行えることを目的として授業を設計した。

1.2 文法的正確さ

中級１は初級修了者を対象としているが、このレベルの学習者は初級の学習内容に関して、受動的な理解（「わかる」）はできるものの、言いたいことに合わせて自ら正しく使うこと（「できる」）ができない場合が多い。したがって、既習知識をどのような文脈（トピック）や場面（機能）で使用するかを意識させ、実際の使用場面における主体的な使用へ結びつける必要がある。また、カリキュラム改編に伴い、従来設置されていた中級レベルの文法クラスは廃止され、文法のみを学ぶ時間がなくなったという背景もあり、授業の中である程度体系的に文法を扱うべきだと考えた。

以上を踏まえ、本授業は「文法」「トピック」「機能」の３軸を設定し、その中で相手に配慮しながらやりとりするストラテジーを習得するコースデザインを行った。トピックは「交流型やりとり」、機能は「交渉型やりとり」に対応させ、それぞれに必要となるストラテジーをピックアップし[1)]、それらのストラテジーやトピックに役立つ文法項目を組み合わせてシラバスを設計した。

2. 授業の内容

2.1 シラバス構成

コース全体の構成は表１に示す通りである。授業は１コマ90分×週２回、全16週行われる。基本的に２回の授業で１課を学習する形で進めた。受講者数は毎学期15～25名前後で、2016年度第１学期コース終了時の受講者数はＡクラス23名、Ｂクラス16名であった[2)]。

前半の６課は交流型やりとりにおける「反応」中心のストラテジーを取

表１　主な学習内容

	課	ストラテジー	トピック	文　　法
交流型やりとり	1	質問する	地理・気候	助詞、～と…
	2	あいづちをうつ	料理の作り方	自他動詞、～て…
	3	聞き返す	観光地	受身、～ている
	4	情報の領域管理	経験談	指示詞、～て（原因）
	5	ものを説明する	趣味・専門	名詞修飾、の・こと
	6	共感を示す	人や町の印象	伝聞・様態、終助詞
	課	ストラテジー	機　　能	文　　法
交渉型やりとり	7	丁寧に話す	目上の人と話す	敬語
	8	前置き（１）	依頼する	授受、使役
	9	前置き（２）	誘う・断る	条件（と・ば・たら・なら）
	10	表現の強さ	アドバイス	
	11	電話で順序良く話す	問い合わせる	ている・てある・ておく

り上げ、「よい聞き手」として会話を継続・展開させることに焦点を当てた。後半の５課は交渉型やりとりにおける「働きかけ」中心のストラテジーを取り上げ、単に目的を達成するだけではなく、相手やその場にあった丁寧さで、相手への配慮を示しながら目的を達成することを重視した。

トピックは、留学生が周囲の日本人に聞かれることが多いであろう話題を選んだ。また、内容よりも文法やストラテジーに意識が向けられるよう、日常的で容易に話せるものにした。機能は大学生が日常生活で遭遇し得る場面を想定し、相手（友だち／先生）による丁寧さの選択も含めた。

文法項目は、やりとりのストラテジーとして役立つ用法を、実際の使用場面に即した文脈で取り上げる工夫をした。具体例としては、情報の領域管理に関わる指示詞の文脈指示用法や共感表示の終助詞、ものの説明に使用される名詞修飾節、前置き表現に使用される条件節、丁寧さに関わる敬語や授受表現などである。また、前半はトピック別に使用されやすい文法を組み込むことで、初中級レベルの文法項目をできるだけ網羅するようにした。

2.2　教室内外活動

教室活動を考える上で重視したことは、学習者にストラテジーや文法を

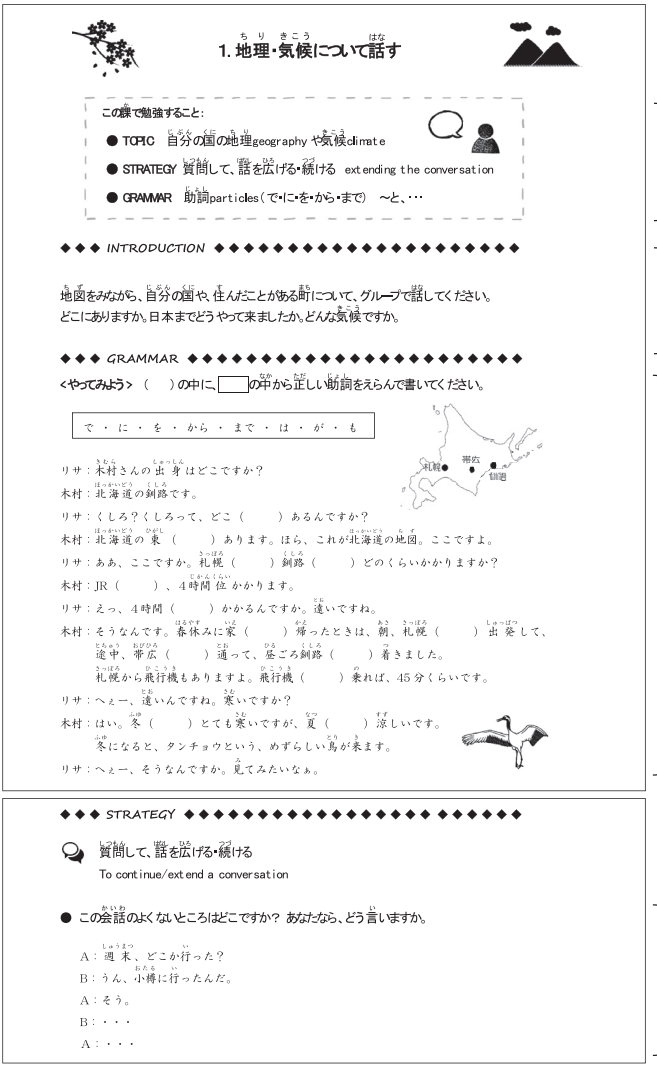
「意識化」させることと、４技能を複合的に取り入れることである。表２に前半と後半の授業の流れを示す。それぞれ①～④を１回目の授業で、⑤以降を２回目の授業で行った。

表２　主な授業の流れ

1. 前半（１～６課）	2. 後半（７～11課）
予習：語彙リスト	予習：文法の確認問題
①目標の確認	①目標の確認
②ペアで会話	②ロールプレイ
③文法問題を含むモデル会話を読む	③よくない会話例を読んで、考える／文法問題を含むモデル会話を読む
④文法解説と練習	
宿題：掲示板への書き込み（⑦の準備）	④表現・文法の解説と練習
⑤よくない会話例を読んで、考える	⑤ストラテジーの解説と練習
⑥ストラテジー・表現の解説と練習	⑥ペアでロールプレイ、発表
⑦ペアで会話（ペアを変え２～３回）	⑦自己評価（ペア）
⑧自己評価	宿題：メール課題
復習クイズ（次週）	復習クイズ（次週）

まず、各課のはじめに、学習するトピック／機能、文法、ストラテジーを確認した（1,2－①）。また、学習内容に入る前に現時点の能力を確認するため、一度自力で話す時間を設け、自己評価の際に授業前後の能力の変化を比べられるようにした（1,2－②）。文法は、はじめに選択問題等を含むモデル会話をペアで読み、学習者が自ら使い分けに気づくようにした（1,2－③）。ストラテジー導入の際にも、ミスコミュニケーションを含む会話例を提示し、よくないところを考えることから始めた（１－⑤、２－③）。図１は第１課の教材の一部である。

文法練習（1,2－④）及びストラテジー練習（１－⑥、２－⑤）では、ポイント表現の聞き取り（聞く）、シャドーイング（聞く・話す）、ロールプレイ（話す）、ＬＩＮＥメッセージへの返答（読む・書く）、ＳＮＳの写真へのコメント（書く）など、４技能を取り入れた練習を行った。例えば第６課では、図２のように様態を表す「～よう・そう・みたい」を使ってＳＮＳの写真にコメントする練習をした。また、第９課では図３のように、誘いのロールプレイの中で、前置き表現として条件節「～ば・たら」を使う練習をした。これらのタスクは必ずしも当該文法を使用しなくても達成



1. 地理・気候について話す

この課で勉強すること:

● TOPIC　自分の国の地理geography や気候climate

● STRATEGY　質問して、話を広げる・続ける　extending the conversation

● GRAMMAR　助詞particles（で・に・を・から・まで）　～と、…

◆◆◆ INTRODUCTION ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

地図をみながら、自分の国や、住んだことがある町について、グループで話してください。
どこにありますか。日本までどうやって来ましたか。どんな気候ですか。

◆◆◆ GRAMMAR ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

<やってみよう>（　）の中に、□の中から正しい助詞をえらんで書いてください。

で・に・を・から・まで・は・が・も

札幌　帯広　釧路

リサ：木村さんの出身はどこですか？
木村：北海道の釧路です。
リサ：くしろ？くしろって、どこ（　　）あるんですか？
木村：北海道の東（　　）あります。ほら、これが北海道の地図。ここですよ。
リサ：ああ、ここですか。札幌（　　）釧路（　　）どのくらいかかりますか？
木村：JR（　　）、4時間位かかります。
リサ：えっ、4時間（　　）かかるんですか。遠いですね。
木村：そうなんです。春休みに家（　　）帰ったときは、朝、札幌（　　）出発して、途中、帯広（　　）通って、昼ごろ釧路（　　）着きました。
札幌から飛行機もありますよ。飛行機（　　）乗れば、45分くらいです。
リサ：へえー、遠いんですね。寒いですか？
木村：はい。冬（　　）とても寒いですが、夏（　　）涼しいです。
冬になると、タンチョウという、めずらしい鳥が来ます。
リサ：へえー、そうなんですか。見てみたいなぁ。

◆◆◆ STRATEGY ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

質問して、話を広げる・続ける
To continue/extend a conversation

● この会話のよくないところはどこですか？ あなたなら、どう言いますか。

A：週末、どこか行った？
B：うん、小樽に行ったんだ。
A：そう。
B：・・・
A：・・・

①
②
③
⑤

図１　教材例（第１課①～③、⑤[3)]）

できるが、本授業ではあえて文法を指定することで、既習知識がどんなところで活用できるのか意識させることを図った。

１－⑦及び２－⑥では学習した文法とストラテジーを使用してペアで会話、またはオリジナルのロールプレイを作成し発表した。また前半はその

図２　教室活動例（第６課）

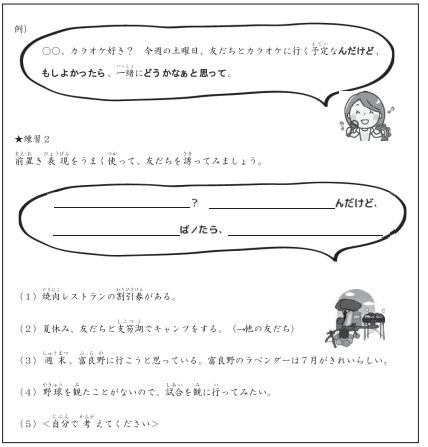


図３　教室活動例（第９課）

準備として、インターネット上の掲示板「lino」[4)]への書き込みを宿題とした。各課の２回目の授業前までに各自書き込みをし、教師が添削した。事前に書き込みをした内容について教室で話すことになるため、教室内では内容を考える時間と負担が軽減され、ストラテジーと文法に意識が向けられやすくなる。また、ＳＮＳ投稿のように気軽に取り組めることと、書いた文章が教師だけではなくクラスメート全員に共有されることで、モチベーションの向上にもつながると考えられる。毎学期の授業アンケートにも「lino の宿題が楽しかった」というコメントが見られた。図４は実際に学生が書き込みをした掲示板の画面である。後半は授業後の宿題として

http://ja.linoit.com

図４　オンライン掲示板への書き込み

メールを書く課題を取り入れた。例えば第11課では、授業内では主に電話を想定し口頭で問い合わせる練習を行ったが、宿題としてメールで問い合わせるタスクを行った。

また、学習内容の意識化だけではなく、学習者が自己の能力を客観的に把握することも重要な意識化の一つである。そこで、振り返りや自己評価を積極的に取り入れ、常に「何を学習しているのか」「何ができるようになったか」を意識化させる工夫を行った。各課最後の自己評価（１－⑧、２－⑦）では、それぞれ⑦、⑥の活動でその課の文法やストラテジーに気

自己評価シート　　月　日　中級やりとり１　A・B

【1．地理・気候について話す】　　名前：＿＿＿＿＿＿＿＿

1．＿＿＿＿＿＿さんの国・町について、わかったことを書いてください。

2．どんな質問をしましたか。５つ書いてください。

・
・
・
・
・

3．↑の質問のなかで、一番話が広がった質問に○をつけてください。

4．自己評価

（５：完璧！　４：よい　３：まあまあ　２：あまりよくない　１：全然だめ）

①	相手の話をよく聞いた。	５・４・３・２・１
②	相手にたくさん質問した。	５・４・３・２・１
③	わかりやすく話した。	５・４・３・２・１
④	助詞に気をつけて話した。	５・４・３・２・１
⑤	はじめより上手に話せるようになった。	５・４・３・２・１

4．改善点（次から気をつけたいこと、どうすればもっとよくなるか）・質問など

図５　自己評価シート（第１課）

をつけたかどうかを振り返らせた。例として図５に第１課の自己評価シートを挙げる。評価項目は課ごとに設定した。

更に、中間課題としてインタビューレポートを課し、前半で扱ったトピックについて日本人と会話し、その結果と自己評価を提出してもらった。

3. 評価方法

最終成績は平常点50%、中間・期末テスト50%で計算した。平常点は毎課の復習クイズ、自己評価シートと宿題から算出した。中間テストは筆記試験とペアでの口頭試験、および日本人へのインタビューレポート課題を課した。期末テストは個人面接試験（対教師ロールプレイ）、およびグループによるスキット作成と発表を行った。評価基準については、文法の正確さはある程度客観的な評価が可能であるが、ストラテジーに関しては客観的な評価が難しい。また、新カリキュラムが「協働」における円滑なコミュニケーションと人間関係構築を目的としていることを踏まえ、インタビュー課題やグループワークといったプロジェクト型の活動も取り入れたが、成績としてどう点数化するべきかが、今後の大きな課題の一つである。

4. 学習者の反応

中間レポート及び終了時のアンケートにおいて、「自分は何ができるようになったか」という質問をしたところ、学習者の回答からは、やりとりのストラテジー及び丁寧さへの意識化がうかがえた。以下は2016年度第１学期のレポート及びアンケートにおける学習者のコメントの一部である。

表３　レポート・アンケートにおける学習者のコメント[5)]

（１）ストラテジーへの意識化
・相手に話すとき、うん、そうですかなど使います。会話はスムーズになりました。 ・日本にくらべて、アメリカであいづちはあまり使われていません。だから、よく忘れてしまいます。もっとあいづちをうてるようになりたいと思います。 ・スムーズに会話内で質問を聞けるようになった。前に、わからない時、さいごにやぜんぜん聞かなかった。会話を終えられるか心配したから。 ・おねがいする、さそう、アドバイスすることなどもっとできるようになったと思います。

（2）丁寧さへの意識化
・尊敬語を気軽いに使えるようになってきた。 ・ていねいにはなす、せんぱいとせんせいにおねがいする、さそう、ことわるができるようになった。 ・ともだちともっと casual/natural にはなしました。でもけいごはまだできませんでした。

また、授業全体に対する評価としては学習内容が「役に立つ」、日本語で話す「自信がついた」というコメントが多く見られた。ここから、本授業は「わかる」から「できる」への移行に多少なりとも貢献できたと思われる。

中上級科目共通で行った授業アンケートの結果は表４の通りである。特に項目(1)(6)の結果から、授業活動の目的に対する理解はされており、日本語力が上がったという実感もある程度得られているといえる。

表４　2016年度第１学期授業アンケート結果[6)]

質　問　項　目	平均値
(1)　日本語力　（上がった 5－下がった 1）	4.3
(2)　進め方　（速かった 5－遅かった 1）	3.3
(3)　教材・資料（よかった 5－悪かった 1）	4.3
(4)　授業準備　（大変だった 5－簡単だった 1）	3.0
(5)　宿題　（多かった 5－少なかった 1）	3.0
(6)　活動目的　（理解できた 5－できなかった 1）	4.4

5.　まとめと今後の課題

本授業は、中級１のキーワードである「正しく」を達成するために、一見「やりとり」とは遠いように思われる文法をあえて重視した。また、交流型・交渉型やりとりに必要なストラテジーと、文法・トピック・機能の３軸を融合させることで、学習者が学習内容を意識化し、「できる」をより実感しやすい授業を目指した。庵（2015：18）では「現行の「中級」がコースデザインとして達成感を得られにくい（『中級』の教科書で学ぶ内容がなぜ必要なのか、それができるようになったらどの程度のことができるのか、といったことが学習者にとって実感しにくい）」ことが指摘されているが、本稿では、アウトカム重視型カリキュラムに基づき、学習者が「わかる」

ことを「意識化」し「できる」につなげることで、学習者に達成感を与える授業の試みを報告した。また、相手への配慮を中心に据えることで、「つながる」ための「できる」を目指した。

しかしながら、まだ考慮すべき課題も多い。特に個人の性格やスタイルによって「正解」があるわけではないコミュニケーションストラテジーを客観的に評価することは難しく、成績として点数化しにくいという問題がある。この問題は他レベルのクラスからも挙がっており、今後やりとりモード全体で取り組んでいくべき課題である。

また、文法を重視したことに対しては、学習者からもおおむね肯定的な意見が多かったが、アンケートの要望には、「もっと文法を勉強したい」というコメントが多く見られた。今後は初級文法の復習だけではなく中級レベルの「やりとりに役立つ文法」も可能な限り取り入れ、実際の使用場面に即した教室活動を更に工夫していくことで、学習者がより「達成感」を感じられる授業へと改善していきたい。

注：

1）取り上げるストラテジーや教室活動を考える上で、交流型やりとりについては特に岩田・初鹿野（2012）、交渉型やりとりに関しては中居他（2005）等の教材を参考にした。しかし、二つのタイプを文法と結び付けて扱った市販の教材はないため、本授業では筆者が作成した資料を用いて授業を行った。
2）A・Bは曜日違いのクラスで、両クラスとも筆者が担当し、同じシラバスのもとで進められた。
3）このストラテジーと会話例は岩田・初鹿野（2012：91）を参考にした。
4）無料で利用できる付箋共有サイト「lino」（http://ja.linoit.com/）を使用した。
5）誤用も含めて原文のまま記載する。
6）値は2クラスの平均値である。回答者数はAクラス23名、Bクラス15名であった。

参考文献：

庵功雄（2015）「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵功雄・山内博之編『現場に役立つ日本語教育研究1 データに基づく文法シラバス』

pp.15-46　くろしお出版
今泉智子（2016）「相手の意図・解釈への意識化を軸とした「やりとり」授業―文法・トピック・機能融合型シラバスの設計―」『日本教育方法研究会誌』Vol.23 No.1 pp.54-55
岩田夏穂・初鹿野阿れ（2012）『にほんご会話上手！ 聞き上手・話し上手になるコミュニケーションのコツ15』アスク出版
鄭惠先・須藤むつ子・今泉智子・水谷圭子（2016）「中級「やりとり」科目の実践報告―アウトカム重視型のコースデザイン―」『日本教育方法研究会誌』Vol.22 No.3 pp.12-13
中居順子・近藤扶美・鈴木真理子・小野恵久子・荒巻朋子・森井哲也（2005）『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』スリーエーネットワーク

いまいずみ　さとこ（国際教育研究センター非常勤講師）